たちげい青森
青森江古田会
2020.2.29
15

『縄文の世界へと誘う三内丸山の遺跡』

誌上
フォト・ギャラリー

青森県の宝・三内丸山遺跡が来年にも世界遺産に登録されようとしています。三内の地に巨大な六本柱がそびえ立った15年前から撮影を続けてきました。私は雪の頃が一番好きですが、四季折々に珠玉の風景をみせてくれる場所です。

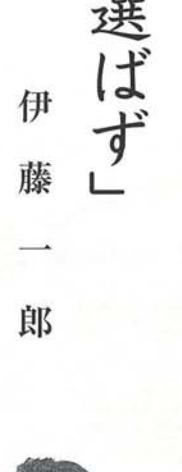
夏のある日、朝陽がまぶしく白雲を染めて縄文の世界へと誘うかのような瞬間を撮った写真は、青森県を象徴する風景としてカレンダーや写真集で広く皆様に見ていただいております。

<写真と文> 和　田　光　弘
写真家・芸術学部写真科講師

Essay

「無常の風は時を選ばず」

伊藤一郎



数年前、芝居仲間のTちゃんが鬼籍に入った。

彼とは花見や旅行に出かけたり、互いに誘い合って演劇やコント、地元のテレビドラマやCM出演などやってきた戦友である。机の抽斗いっぱいに漫然とためていた写真を整理していると、分厚い封筒から彼と彼の写真が複数枚、出て来た。ずっと渡しそびれていたものだった。早速年賀状を頼りに奥さんに連絡をとると「連休に子供たちが帰省するので丁度いい」と大層喜んでくれた。

久しぶりの電話だったため話しが弾んだ。彼女は屈託のない口調で「この春・息子が大学受験に失敗しちゃった」と話す。返事に窮していると「東大受験に失敗した」のだという。これって、トンビが鷹を産んだってこと?」と話す。「どう思う?」と畳みかけてきた。「そうだね」とは言えずに言葉を濁していると、「ノーコメント?」としつこい。やむなく私は「ノーコメントです」と応えた。受話器の向こう側で大きな笑いが起こった。

もともと某有名国立大学に籍を置いていて、今期、さらに上をめざしてみようと一念発起したようだった。残念な結果にはなったが、私などからはあるいは快挙と言えなくもない。

今回の写真の中にも、東大赤門の前や三四郎池で撮った集合写真が含まれていた。菊谷栄（エノケン作品の作者）の演劇の現地調査にかこつけて浅草・本郷界隈を歩いたのだ。写真を眺めていたからか、数日前にTちゃんが夢の中に妙に鮮やかに現れた。私より少し年若のTちゃんである。私は「家族に何か伝えたいことがあったら言ってみろ」とけしかける。彼は只ニヤニヤしていただけだった。生前の彼であれば「東大?遠いよなぁ。授業参観さえ行けるかどうか。」などと、とぼけて見せただろう。

多趣味な男だった。知る限りでは写真（暗室あり）、ギター、ハーモニカ、フォークソング、落語、晩年には浪曲に凝っていた。特にお笑いと酒を愛した好漢だった。そんな男がいつしか風のように消えた。晴れやかな空には、積乱雲ばかりで、トンビも鷹も見えない。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

筆者の**伊藤一郎**さんは芸術学部文芸学科を昭和51年度に卒業。現在、青森ケーブルテレビ街角リポーターを努めている。夏の「青森ねぶた」や「花火大会」では連日ひとりで生中継をするなど……活躍中である。本稿は「ACTチャンネルガイド」の「いっくんの紙面散歩その46回」を転載しました。

「TUGARU」に続き…
イサバのカッチャ十日市さんCD発売
南部弁ラップも聞いて！

「南部弁ラップはないの？」。五所川原市出身の吉幾三さんの津軽弁ラップ「TUGARU」が話題になったことを受け、八戸市出身のタレント**十日市秀悦**さんがパーソナリティーを務めるラジオ番組に要望が相次いだ。期待に応え、歌詞や映像に本家のパロディをちりばめた「カッチャラップ」を制作し、動画投稿サイト「ユーチューブ」に公開するとじわじわ再生回数が増加。反響を受けてかねてからCD化を求める声が多かった「南部弁ラジオ体操」も併せて収録したCDを発表した。

カッチャラップは**十日市**さんが扮するお馴染みのキャラクター「イサバのカッチャ」が、ラッパー風の奇抜な格好に身を包み、カッチャの日常やぼやきを歌う。歌詞は**十日市**さんが手がけ「じゃわめぐ、だぐめぐ、ぱくたらめぐ（胸さわぎする、ドキドキする、ハートが止まりそう）」のサビのほか「ぎゃねぐさせるのでんだっきゃあ～（虚しくさせるの誰なのよ～）」など、南部弁をぎゅっと詰め込んだ。

ミュージックビデオの撮影は陸奥湊駅前や館鼻岸壁、馬淵川などで敢行。魚菜市場での場面や岸壁での自転車で疾走するシーンは、カッチャらしさ満載の仕上がりとなっている。

「あんだ、ナニャドヤラってへれる（言える）が？」「おら、めどつ（カッパ）みだよ」など、クスッと笑ってしまう合いの手も聞きどころ。

十日市さんは故・正部家種康（郷土史家）のモノマネしている部分もあるので、聞いてみて」と笑顔も見せた。また「若い人に南部弁に興味をもってほしい」と話し「ユーチューブでも公開しているので、孫がおじいちゃんやおばあちゃんにスマートフォンなどで見せてあげるような場面が生まれれば最高ですね」と思いを語った。

一緒に収録されている南部弁ラジオ体操は、「ぐれっとここまって正面で胸そらして～」など、カッチャが南部弁で先導。館鼻岸壁で開催されている朝市で流されており、観光客らから「CDがほしい」という声が多くあったという。ラジオ体操第1と第2が収められている。**十日市**さんは「学校の運動会や地域の集まりなど、ぜひ南部弁バージョンで体操してほしい」と語った。

CDは一枚千円（税込み）。八戸市のユートリー、はっち内カネイリミュージアムショップ、RABオンラインショップなどで販売している。

（令和2年1月24日・東奥日報掲載）

「カッチャラップ」と南部弁バージョンのラジオ体操が収録されたCDを手に笑顔の十日市秀悦さん

♪じゃわめぐ　だぐめぐ　ぱくたらめぐ～

和田光弘 写真展　つがる・青森・ふゆのいろ

銀座：2020年1月23日(木)～1月29日(水)

●銀　座　03-3542-1860
〒104-0061 東京都中央区銀座3-9-7
トレランス銀座ビルディング1F
10:30-18:30(最終日15:00まで) 日・祝休館

大阪：2020年3月5日(木)～3月11日(水)

●大　阪　06-7739-2125
〒530-0005 大阪市北区中之島3-2-4
中之島フェスティバルタワー・ウエスト1F
10:00-18:00(最終日15:00まで) 日・祝休館

元局アナ「声」で社会貢献
「あおもりボイスラボ」結成

朗読会や動画発信

県内在住のテレビ局やラジオ局の元アナウンサー4人が昨年、社会貢献を目的にアナウンスユニット「あおもりボイスラボ」を結成した。

アナウンサーとしての経験を生かし、公共施設での朗読や、動画投稿サイト「ユーチューブ」による発信など、活躍の幅を徐々に広げている。

4人は青森朝日放送とエフエム岩手の元アナウンサーで同ユニット代表の**大川原儀明**さん(64)とエフエム青森元パーソナリティー、ラジオ福島元アナウンサーの大川原みゆきさん(62)、ともに青森朝日放送元アナウンサーで現在はフリーアナウンサーとして活動する藤田亜希子さん(48)と**坂口千夏**さん(43)。

大川原さんとみゆきさんは夫婦で、藤田さんと**坂口**さんは**大川原**さんの元同僚。仕事とは別の形で朗読やナレーション、司会などを通じて地域に貢献したいと**大川原**さんが呼び掛け、昨年10月にユニットを結成した。もともと県内在住の元局アナは少ない。放送局で鍛えた高い音声表現の技術を持つユニットは県内では貴重な存在で今後、多彩な活動が期待される。

ユニットは今年1月、県近代文学館で開かれた長部日出雄さんの追悼朗読会から本格的に活動を始めた。

活動に賛同する青森市のフリーカメラマン・澤谷健司さん(40)の協力を得て、本県のさまざまな分野で活動している身近な人たちを紹介するコンテンツ「あおもりボイスパーク」も制作。5月から月に1~2回のペースでユーチューブにアップし、これまでに美容室経営者ら4人を取り上げた。

今月18日には本県詩壇の中心的存在だった詩人一戸謙三さんをテーマに、**大川原**さんが同館の文学講座で朗読する。

大川原さん夫妻は「局アナのスキルをもっと地域に役立てたい」、藤田さんと坂口さんは「朗読会では読み手によって、いろんな読み方があると喜んでもらえた。一緒にやることで刺激になるし、活動の幅が広がる」と話した。

ユニットの知名度はまだ低い。4人は「こういうことをやってほしいとか、社会貢献できることがあれば、ぜひ声を寄せてほしい」と意欲を示す。問い合わせは「あおもりボイスラボ」フェイスブックで受け付ける。

(この稿は令和元年8月16日・東奥日報朝刊に掲載。**大川原儀明**さんは昭和53年、**坂口千夏**さんは平成10年、ともに芸術学部放送学科を卒業した、青森江古田会のメンバーです)

今後の活動について語り合う(左手前から時計回りに)大川原さん、みゆきさん、藤田さん、坂口さん

長部日出雄『追悼朗読会』で活動したボイスラボのスタッフたち
(写真提供、県近代文学館)

生誕110年 作家・大岡玲さんらトーク

五所川原『斜陽館』

五所川原市金木町出身の作家・太宰治の生誕110周年を記念し、芥川賞作家・大岡玲さんらによるトークセッションが11月16日太宰の生家「斜陽館」で行われた。テーマは「太宰と酒と津軽衆」。来場した30人は、ハイボールを飲みながら太宰談義に聞き入った。

津軽鉄道ハイボール列車実行委員会が主催した。大岡さんのほか、青森出身で紀行作家の**山内史子**さん、斜陽館の伊藤一弘館長が参加した。

大岡さんは「太宰という人は、人を笑わせて、人から愛されたかったのではないか」「人間ってどこか切なくて痛々しい。それが如実に表れているのが太宰の魅力」と述べた。

山内史子さんは「冬の寒さとか岩木山の景色とか、青森の人は太宰が書かなかった行間を読める立場におり何倍も楽しめる。太宰をもっと愛してほしい」と呼び掛けた。

伊藤館長は太宰の人柄や、太宰が暮らした当時の金木町が栄えていたことなど解説した。

会場では東京・銀座のバー「ロックフィッシュ」店主でハイボールの火付け役とされる間口一就さんが腕をふるった。来場者は、太宰の好物などが詰まった弁当をつまみにハイボールを味わい、ほろ酔い気分となった。

旅館だった斜陽館に泊まったことがある仙台市の額田眞弓さん(59)は「すごく有意義な時間だった。『津軽』を読み返したくなった」と語った。

17日は津軽鉄道で間口さんのハイボールを楽しめる列車が運行される。

(令和元年11月17日・東奥日報の朝刊に掲載。この企画のコーディネーターで紀行作家の**山内史子**さんは青森市出身。平成元年芸術学部文芸学科を卒業後、英国ペンギン・ブックス社でプロモーションを担当後に独立。『英国ファンタジーをめぐるロンドン散歩』『赤毛のアンの島へ』『ニッポン「酒」の旅』などの著書がある。現在東京在住。)

太宰は愛されたかった…

暖冬、日差しあっても…地吹雪「気分」存分に

―五所川原―

五所川原市金木町で1月27日、冬季恒例の「地吹雪体験」が始まった。今年は例年にない暖冬で、吹雪はおろか日差しがのぞく期待外れの天候となったが、雪に馴染みのない台湾からのツアー客がかんじきをつけて雪の上を歩くなどして雪国の気分を味わった。

主催者の「津軽地吹雪会」(**角田周**代表)は雪不足のため現在、受け入れを休止している。しかし、この日は台湾ツアー客ら32人の参加が事前に決まっていたため、会場を芦野公園から五所川原農林高校の実習農園「大東農園」に変更して実施した。

会場の牧草地は十数センチの雪に覆われ、固まっているものの白いままの雪原が広がっていた。参加者は**角田周**さん(66)たちスタッフからかんじきのつけ方を教わり、角巻きを羽織って歓声を上げながら雪を踏みしめて歩いた。

しばらく歩き回った後は角巻を雪の上に敷いて寝そべったり、雪を掛け合ったりして遊んだ。家族でツア

ーに参加したリン・シュウ・ジェンさん(40)「雪がなくても空気がおいしいしたのしい。東北の良さを世界に伝えたい」と笑顔をみせた。**角田周**さんは「雪がなければないなりに楽しんでもらえるよう全力を尽くした。今年は東京五輪も控えているので、ずっとウエルカム感をだしていきたい」と話した。

(令和元年1月28日の東奥日報の朝刊に掲載されていたもの。記事中の**角田周**さんは音楽学科を昭和51年卒業、五所川原市金木町に在住。国土交通省の「観光カリスマ」とつとめている。)

和田光弘写真展「つがる・青森・ふゆのいろ」キャノンギャラリー(東京) 1月29日まで

津軽地方の風景や人々の生活を収めた36点を展示。15年にわたり撮影した中から冬の写真を選んだ。凍てつく岩木川や津軽平野は厳しい環境を、金木町(現五所川原市)や青森・古川市場の光景は人々の温かさを表現している。

東京での個展は2010年以来。**和田光弘**さんは「ふびいても寒くてもめげない津軽の人々の姿を都会の人に伝えたい」と語った。3月5日から11日まで、大阪市の同ギャラリー大阪でも開く。

(**和田光弘**さんは昭和44年に写真学科を卒業。神奈川県鎌倉市に在住し、母校の芸術学部写真学科の講師を務めている。本号の表紙も担当。この記事は令和2年1月24日の東奥日報朝刊から転載したものです)

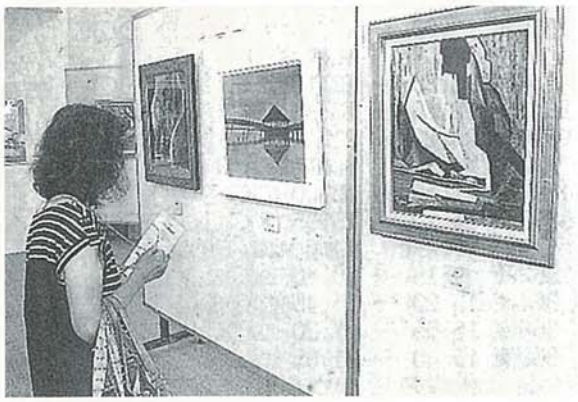
ワイエス・アート華曜会 絵画展 青森市のリンクモア平安閣市民ホールで(9月8日まで)

同市の絵画サークル「ワイエス・アート華曜会」絵画展の6回目の作品展。会員8人と講師の**鈴木義勝**さんによる水彩、油彩、アクリル、色鉛筆の作品約30展を展示している。

雪上に伸びる木の影を印象的に描いた五十嵐なち子さんの水彩画、滝の風景を点描で表現した小堀敏子さんの油彩画など力作が並ぶ。

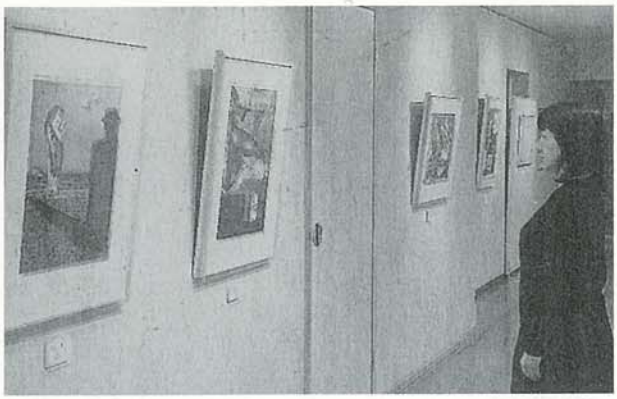
鈴木義勝さんは「私は基本的なことを修正する程度で、それぞれの描き方を尊重している。個性豊かな作品が揃った」と話した。

(令和元年9月7日、東奥日報の朝刊に掲載。講師の**鈴木義勝**さんは昭和50年、美術学科を卒業。青森市に在住、美術教室を主宰している。)



第3回 あおもり文化アート展 青森市文化会館2階展示室 12月22日まで

青森市所蔵の美術作品を中心に、年4回にわたってテーマごとに紹介する同展。3回目となる今回は「クリスマス」をテーマに、同市出身・ゆかりのある作家の版画・油彩など35点を展示している。



山内ゆり子の「ベンチの女」をはじめ、赤や緑のクリスマスカラーを基調とした作品や、関野準一郎の「ニューヨークの宿にて（アメリカ）」など、季節に合わせた作品が並ぶ。

主催する同市文化スポーツ振興公社の**柴田園子**主事は「新聞記事でクリスマスの歴史を振り返るコーナーもある。夜8時までやっているのでぜひ立ち寄って」と話す。

（令和元年12月20日、東奥日報に掲載。この展示製作を担当した**柴田園子**さんは、演劇学科を平成8年に卒業しています）

菊谷栄の代表作『最後の傳令』登場！

劇団扉座第65回公演

劇団『扉座』が喜劇王エノケンの劇団座付き作者として多くの名作喜劇を生み出し、日中戦争で戦死した青森市出身の**菊谷栄**を描いた『最後の傳令―菊谷栄物語―1937津軽～浅草』を昨年11月から12月にかけ厚木市文化会館と新宿紀伊国屋ホールで上演した。**菊谷栄**はわが江古田会の大先輩。青森でも篠崎淳之介の書き下ろしで、劇団雪の会と青森文化会館の会館記念公演とで2回、**菊谷栄**の創作劇を上演している。今度の作・演出は青森に本籍のある横内謙介で、本県出身の俳優三人を客演に迎え「ここまで津軽弁の芝居をやるのは初めて、楽しい芝居に仕上がった」と語った。青森上演は今のところ未定という。

青森江古田会会員名簿（令和2年2月2日現在）

1	赤穂清美	写真	H7年卒	八戸
2	荒正典	写真	S55年卒	むつ
3	荒井宏	文芸	S40年卒	三沢
4	石田良光	演劇	S35年卒	春日部市
5	伊藤一郎	文芸	S51年卒	青森
6	岩村雅裕	映画	S52年卒	階上
7	上崎正	写真	S38年卒	青森
8	大川原儀明	放送	S53年卒	青森
9	大澤由喜	文芸	S47年卒	東京
10	大山禮二	演劇	S33年卒	東京
11	奥山洋一	写真	S57年卒	十和田
12	角田周	音楽	S51年卒	五所川原
13	工藤陽子	音楽	S54年卒	つがる
14	工藤浩二	放送	S54年卒	青森
15	熊谷真美子	音楽	H2年卒	青森
16	高坂進	写真	S41年卒	青森
17	小林智栄	美術	S51年卒	八戸
18	駒井亜由美	放送	H18年卒	千葉
19	斎藤義隆	写真	H5年卒	五戸
20	笹田正治	放送	S38年卒	青森
21	坂口千夏	放送	H10年度	青森
22	柴田園子	演劇	H8年卒	青森
23	鈴木義勝	美術	S50年卒	青森
24	須藤敏	文芸	S54年卒	青森
25	須藤秀一	写真	S43年卒	青森
26	高清水奈穂子	演劇	H4年卒	八戸
27	高木保	演劇	S32年卒	青森
28	田中宏	放送	S43年卒	青森
29	武部由子	映画	H3年卒	米国
30	豊島紘武	演劇	S40年卒	千葉
31	十日市秀悦	映画	S52入学	東京
32	能代一雄	写真	S46年卒	青森
33	濱敬子	写真	S52年卒	青森
34	松谷和子	放送	S54年卒	五所川原
35	向中野光秀	美術	S45入学	青森
36	盛田和穂	音楽	S27年卒	青森
37	山内史子	文芸	H1年卒	東京
38	和田光弘	写真	S44年卒	鎌倉
39	渡辺隆子	音楽	S55年卒	青森

十日市秀悦の泣き笑いの劇場 第十一回

「ひょうきん予備校」に出演　言葉の壁に阻まれて

付き人たちの劇団「付き人軍団天下を取る会」の公演を、なんとあのクレージーキャッツ、ドリフターズを輩出した大手のプロダクションワタナベプロの人が見に来てくれた。当時、漫才ブーム真っただ中、ツービート、B&B、紳助竜助…この時ナベプロはヒップアップしかブームに乗せることができず、次のブームがきた時のため新人を発掘していた。実はこの第一回新人オーディションに私は決勝で落ちたのです。「なにクソ！」ガックリしていられない、ズーズーしく劇団公演のチケットを無理やり渡してきた。その時の審査員の方が来てくれ、翌日電話がかかってきた。

「面白かったよ、明日からうちに来てよ！」

ナベプロに預かってもらえることになった。若手お笑い集団「ビックサーズデー」、中山秀征、石塚英彦がいた。プロダクションに所属じゃなく預かりというのは本人次第！食べていける約束もなくアルバイトをしながら稽古に励み、世に出るチャンスを伺い何度もオーディションを受けました。

一年程した時、フジ系「オレたちひょうきん族」の兄弟番組「ひょうきん予備校」ゴールデンタイムのレギュラーを射止めた。この番組は新人お笑い芸人が先輩芸人の講師から芸能界を生き抜くサバイバル術を教わるという30分。新人芸人は最後の15分で講師に質問し、笑いを取らなければならないが、24人中5人しかオンエアされない。ダウンタウン、ハイヒール、ピンクの電話、野沢直子、井森美幸、ジミー大西そうそうたるメンバーがライバルだった。オンエア率が悪いと横澤彪プロデューサーがニコニコ笑いながら「ギャラ泥棒！」と言って肩をたたいた。たった4500円なのに…

その厳しい競争を勝ち抜いて、ダウンタウンとともに次のトーク番組のチャンスをつかんだ。この時「言葉の壁」にぶつかった！振られてネタを受けようとすると横から瞬時に関西弁が飛ぶ。当時の私は標準語だった。都会に出て暮らした方なら分かってもらえると思うが、頭の中に「言葉の切替えスイッチ」があり、例えば歩いていて突然首筋に雨水がポタッと落ちたら「ひゃっこい…じゃなく…冷た～い！」

このゼロコンマ何秒の差で言葉が出ない、ワンテンポ遅い。今だったら八戸弁でまくし立て、訳が分からなくても逆に面白くなるのに…。関西弁だって方言じゃないか！

その発想が持てなかった。そうやってもがいていた自分にプロダクションの人が

「十日市、石塚、恵でコンビを組んで何かやってみてよ！」

ホンジャマカの前身が誕生した。次回はホンジャマカからイサバのカッチャ？お楽しみに、へば！

《にちげい青森》第15号
令和2年2月29日 発行
発行所：日本大学芸術学部
校友会青森県支部
（青森江古田会）
発行人：高木　保（支部長）
青森市長島一丁目四－一〇
五拾壹番館内